

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	同朋雑誌
Author(s)	
Citation	龍南會雑誌, 48: 78-80
Issue date	1896-06-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4976
Right	

制服着用　頃日學校揭示して曰く制服を着用するにあらすんば學年試業を受けるを許さずと周匠なる哉用意是にあらすんば以て我校の美をなすに足らず。

朽骨腐肉　一言知己の眞情に感ずれば單身往て
仇を刺す。政も亦好漢なるかな。朽骨腐肉血なく
涙なく打するたも痛痒を感ぜざるもの吾爾を如
何せん。

紀念書物 故值賀理學士の爲めに舊友知人相謀て金を醸し圖書を大學の文庫に納めて以て同氏の紀念をなさんとするの舉あり篤志の士應分の義捐をなさんと欲するものは之を鶴田講師岩佐正雄の兩氏に致せ。

『陽明學』 是れ東都牛込の鉄華書院より出づる所の一雜誌なり自ら云ふ第二の藤樹菴山中齋象山松蔭東行龍雄たらんと欲するものは就て學べど口頭紙面の學人物を陶冶するに足らざるや久し然れども亦た入門の一方便たるを失はず願くば萬難を排して斯學の爲めに勇進せよ每號寄贈を辱ふするの約あり故に一言を費す詳細を知らんと欲せば請ふ廣告案を見よ。

次學年の習學寮 試に我校の一覽表を執て之を閱せよ、雜誌部の附屬たる硯友會の規則を載するに一頁餘を費すも吾習學寮の規定に至りては纔かに數行に過ぎず、是れ諸人の怪みし所、聞く所によれば來學年に於ては全寮生の誓盟によりて各自の遵守すべき一大綱領を議定し自ら設けたる規約は自ら破らざるの大責任制度を確立するなど非常なる根本的改行はるゝと云、果して然らば吾習學寮が偉大なる校風の中心となりて龍山の麓別に一天地を開くに至るは近きにあるべし、姑く聞くかまゝを記して次學年を待つ

同朋雜誌

尚志會雜誌第拾五號

同志會雜誌第拾五號 論說には教授山本悌二郎氏の「我國銀行制度の發達を評きて勸業銀行に及ぶ」と題するものの一篇を掲ぐ、冒頭先づ生産の要素は天然物、勞力及資本の三者なることを述べ、文化發達し經濟益旺盛に赴くに及て資本は三者中尤樞要の地を占むるに至ると説き、夫より一國に於て資本供給の手段を論ぜ、銀行の事に及び、銀行の性質を述べ而して後我國の銀行に移り滔々論ぜらる、此道にさりて有益なるべし。猶未完なり。論說は此一篇にして物足らぬ心地す。維

錄には先づ教授小川銀次郎氏の「地圖の話」、地圖を畫くの法に就きて、丁寧に講述せられたるもの也。次には寶彌陀といふ人の「殘聲餘錄」(其二)文句詩趣を帯びて、筆路縱橫、「海藻標本目錄」自ら年來蒐集したるもの、目錄にして、熱心盡す可し。に、ぶ生さいふ人の稿なり。次に「塵塚」とは綠葉といふ人の隨筆様のもの也。こは嘗て此誌上に小説を掲げたる人ならむ。宜なる哉先「世界は小説」と題して小説を辯護して氣焰を吐く、只小説の歴史の如くに引用せるもの、中にも、嚴格なる意義に於て小説と目す可らざるもの多し。又「和歌と新用語」と題して論ぜらる、中いっし、狃はうれて俳句の冷笑となるなど覺えむ運筆の妙に失笑せしむ。此論旨に就ては記者とても同感なり。思ふに和歌ハ雅言を以て成る。之に妄りに殺風景の新語を用ゐしめば、これ角を矯めて牛を殺すものなり。

斯る注文は新体詩にこそせめ、青年文士の言、畢竟驕兒ののみ、措いて問はずして可なり。さて歩を文苑に進めんか、これぞ本誌の特色。和歌韻文俳句何れ旁らす弁を爭ふ、中にも目立ちて妙なるは、青琴久保氏の漢詩なり。兜城山人の「遊船嶽記」は長篇の漢文、最後に「唐澤山」は小説まがへの記文、署して、こするさあれども、終りに綠葉文叢とあるにて、以前の綠葉氏と異名同人なるを知る可し。流石に健筆感嘆の外はあらむ。文総て艶ほになまめかしき節と多けれど、却て此人の長處ならん。兎に角氏の隨筆様の議論に勝ると一籌。雄辯又光彩ありて、大學通信等有益なり。批評の「本誌前號を讀む」は前號を評議するも周到也。又「歌人さ八犬士」といふあり。八犬士と歌人とは比較せらるべき量なるや、こ、數學に尋れ度し。附錄

の「春季行軍記錄」は總て廿四頁、半田銀山地方を跋渉したる記錄也。本誌の活氣此處に至りて始めて横溢す。是れ健兒の眞面目なり。

校友會雜誌第五十七號

論說欄三篇を收む。冒頭先づ

中山久四郎氏の交友知己の説あり。嘗て北辰に朋友をよみ尙志に眞友論を讀みたる吾人は本誌に又此篇を見て、何如に今日の青年が交友に就て慨する所あるを見、その喜ばしき傾向を歓迎せすんばあらむ。筆を管、腕に起し交友を區別して營利的交友、遊樂的交友、道義的交友の三つとなし、道義的交友の貴ぶべき所以を論じ、眞の知己は我の半なり。第二の我なりと論じ、是より一步を進めて古今の史乘に交友知己の美を求め南洲月照、廉頗、藺相如、秀吉利家、皆驅られて出づ。尙進で内外の交友を觀察し交友美妙の眞理を説き、一轉して今日の交友社會を觀察して其猛者を望み、千秋萬古炎涼の世態竟に「醜手作雲覆手雨」の七文字以外に跳出するを能とざるか。叫び論調最高點に達し、終りに之を求むるは只信の一字にありと説きて漸く局を結ぶ。何等斬新の説を見ず。雖も又熟讀の値有り。次は續出の劇語「ウヰルヘルム、テル」を評論す今回第三幕テルが家の前庭の場面に及べり。嬌澤氏の勤勉驚くの外なし。吾人は毎號可成多くを掲げて早く完了せんとを望む。美並に西洋繪畫の癖も亦長としき論文。本誌十四頁を掲げて猶いっはつべうも覺えず。本誌(四)西洋繪畫」を辯じ美術上繪畫の性質を區別して美艷(形式)意味(内容)の二つとなし専ら美艷の中の色に就て詳説せり。今一々詳記するの違なし。さて歩を雜誌に進むれば十津川高夫氏の幼甥の死を悼むは悲哀の

字、次に文しつといふ人のライセスターの君を懐ふことは又床しき文字なり。所謂英國美術のリフォルマーの生立より、伊太利行、ジョンソンとの交友及そが勉勵、容貌等優にやさしき筆致を以て描き出されれば記者之をよみて飽くを知らざりき。國の耻辱は時として範圍の狭きにあらす國力の弱きにあらすして、寧ろ大文學者大美術家の無きにあるとあり、文しづ氏の此感懐ある又宜なり。小野六藏氏の從軍雜記面白し。文苑には和文に平家物語をよみて、文字論あり、漢文に新築青瑛書院記あり後者は鹽谷教授の手に成る、只題を五號活字にせるは見苦し。和歌は落合氏の選に係り中々賑やかなり。漢詩は先づ寂寥といはざる可らず。批評は例に比して多かられど總評の丁寧なる喜ぶべし。雜報は本誌の一特色にして、事項の豊なるは更にもいはず、皆趣味あるものなり。本號亞麻查俱樂部と此校野球部と快戦の記事を見る能はざりしを憾とす。請ふ來號を待たん。

北辰會雜誌第拾號

文學上の趣味に富めるものは二高の雜誌が、雜報批評に氣概を吐くものは一高の雜誌が、最も後れて生れ最も速に成長し、優に二高に駕して將に一高に逼らんとするものは其れ四高の雜誌なる乎。特に本號の如きは百三頁の大冊子、内容も之に適へり盛なりと謂ふべし。さて論說には齋藤賢道君の「生物學上種の觀念の變遷」は首に生物學上初めて種と云ふ術語を用ゐたるものはアクストートル氏なりとて氏の History of Animal を説き終にダーウソ、ウアーレス二氏の進化論を説けり、題目の示す通り生物學上種の觀念の變遷を論じたるものなり。丸山環氏の生物の變化は承前

にて完結せり、本號にては重に陶汰のこゝを論ぜり。河原始二君の時習寮は寄宿舎論なり緒論あり、本論に入りては時習寮と校風との關係を論じ、學生心得と寄宿寮綱領とを比較して寮風即校風、校風即寮風と論ぜり、文章の割合に議論には許すを得ざれども、未完なれば、今彼是れ云ふは早計に失せんか。春秋原在文氏の莊子管見は八號の續きなるが此號にて完結せり、苟も能く摩訶の大劍を揮て是非人我の塵根を徹斷せば天下は悉く鵬となつて無窮に逍遙する事を得んといひ人その我見偏執を脱却して自然の化に乗せば我は則ち天地にして天地は則ち我なり争ふべき物もなく役せらるゝの形もなし唯虚靜恬淡寂寞無爲なるのみと曰ふこゝ君が此管見の素あるを知るべし。文苑欄は漢詩最も盛、和歌は寧ろ寂莫、俳句あり和文あり漢文あり、通して十二頁を占む。雜報は一と紹介するも煩ければ、題目のみを掲ぐべし、「もだまの說」太古希臘物語集「法窓餘錄」燒李園兒「花供養」小蓬萊春旅記「懷舊」くやみ草「就俳人「茶坊」の九篇を收めて四十六頁とは健氣の程羨むべし。批評には總評一篇あり、九頁に亘りて丁寧に評せり、且つ曰く雜誌號を重ぬる九、月を閱する十二、然るに未だ批評欄が燦然たる異彩を放ちしこゝなく、毎に望む遺憾とせり、嗟乎これ誰の罪や、何爲れや會員諸君猛省一番其炎とたる熱血と其咬とたる精氣とを本會に注がざるや吾も亦た此語を傳りて我校友の反省を促さん欲す。雜報の諸項より分けて言ふべき程のものなげれど孰れも面白し。

前號北辰會雜誌九號批評九十頁の末行「氏が本誌に向て貢ふ」は「本誌が氏に向て貢ふ」の誤植